修士論文（要旨）
2015 年 1 月

大学生の自己愛類型と対人葛藤方略の関連性について

指導　山口一　教授

心理学研究科
臨床心理学専攻
213J4011
根岸優稀

Master's Thesis (Abstract)
January 2015

The Relationship between Narcisstic Type and Interpersonal Conflict Strategies of Undergraduates

Yuki Negishi
213J4011
Master's Program in Clinical Psychology
Graduate School of Psychology
J.F.Oberlin University
Thesis Supervisor: Hajime Yamaguchi

目次

第 1 章　目的 1
第 2 章　方法 1
第 3 章　結果と考察 1
引用文献 3

第 1 章　目的

青年期は自己愛傾向が強まり，自己愛傾向により，対人関係の結び方や適応不適応が異なることが先行研究から言われている。対人関係を考える際には，葛藤場面においてどのような方略を選択するかという対人葛藤方略によって，適応，不適応が異なることが考えられる。そこで，本研究では，青年期にある大学生を対象とし，自己愛傾向と対人葛藤方略との関係を検討することとした。この研究により，大学生の自己愛研究及び対人葛藤方略研究が進展するのではないかと考える。

第 2 章　方法

A 大学の 18 歳から 25 歳までの男女学生を対象に質問紙調査を行った。調査に用いた質問紙は，下記の通りである。

① フェイスシート（年齢，学年，性別，所属）

②自己愛人格目録短縮版（以下 NPI-S：小塩，(1998)）と自己愛的脆弱性尺度短縮版（以下，NVS：上地・宮下(2009)）を混合した尺度

③対人葛藤方略スタイル尺度（以下 HICI：加藤，(2003)）。HICI は公的場面と私的場面を設定して回答してもらった。

第 3 章　結果と考察

750 名に質問紙を配布し，回収されたものは，420 名(回収率 56.0%)であった。そのうち，欠損値があるものなどを除き，295 名の質問紙を調査対象とした(有効回答率 70.2%)。内訳は男性 121 名(41.0%)，女性 174 名(59.0%)，平均年齢は 20.0 歳±1.3 であった。

NPI-S と NVS の 2 つをシャッフルした尺度の全 50 項目を因子分析にかけたところ，他者の言動や反応に敏感で，批判や軽視に傷つきやすいタイプの自己愛を表している因子「過敏型自己愛」と，他者の感情や反応に鈍感で周囲を気にかけない誇大性の自己愛を表している因子「誇大型自己愛」の 2 因子構造が妥当であると判断された。この因子分析の結果は，自己愛を過敏型自己愛と誇大型自己愛に二分して考えた従来からの様々な研究の結果と合致していた。また，自己愛尺度の性差を検討した結果，誇大型自己愛のみが男性の方が有意に高い得点であった。

次に HICI の因子分析を行った。結果，従来の研究の 5 因子構造ではなく，公的場面・私的場面共に，「統合・相互妥協」「強制」「回避」「自己譲歩」の 4 因子構造が妥当であると考えられた。加藤(2003)の研究での HICI 作成過程においても，「統合スタイル」と「相互妥協スタイル」の相関が各葛藤方略スタイル間中で最も高い値を示しており，小林(2011)の研究においては，「妥協スタイル」は，他の方略との明確な区別がなされず，他のスタイルに含まれる一手段として捉えるのが妥当であるとしている。また，森泉ら(2006)の研究にて，「妥当方略」と「統合方略」が非常に類似した特徴であったとされている。そのため，本研究での 4 因子構造という結果は，先行研究と必ずしも矛盾しない結果になったと考えられる。t 検定で男女差を検討したところ，自己譲歩スタイルと強制スタイルは，男性の方が女性より有意に高かった。この分野の先行研究の結果を総合すると，男性は今回設定したような葛藤場面において，適応的であるとは言えない方略をとりやすいといえる。

最後に男女別に自己愛の 2 類型と対人葛藤方略尺度の 4 因子の相関を検討した。その結果，男女とも誇大型自己愛は，公的場面・私的場面とも強制スタイルと有意な正の相関が見られた。さらに，女性の公的場面を除いて統合・相互妥協スタイルとも有意な正の相関が見られた。このことから，男女とも，誇大型自己愛が高い人は自分の意見を主張し，その意見を相手が受け入れてく

れるのであれば強制的に自分の意見を押し通し，また，相手も意見を主張する場面であれば，自分の意見も相手の意見も取り入れたところで意見を調整する可能性もあるのではないかと考えられた。

過敏型自己愛は男女で結果が大きく異なった。男性の場合は強制スタイル，回避スタイル，自己譲歩スタイルと正の相関があり（公的場面では統合・相互妥協スタイルとも正の相関がみられた），女性の場合は，公的場面，私的場面共に統合・相互妥協スタイルと正の相関がみられた。この結果から，男性の過敏型自己愛が高い人は，親密な関係性において適応的な方略を選択できず，対人関係を築いていくことが苦手なのではないかと考えられ，公的な葛藤場面においても，「統合・相互妥協」と有意な正の相関があり私的場面と比較するとより適応的であるともいえる。しかし「回避」スタイルと最も相関が高かったことから，必ずしも葛藤方略は上手ではないと言える。女性の場合は，自分が他人からどう思われるかを気にすることが適応的な方略に結びついていると考えられた。

今後の課題として、自己愛尺度の因子寄与率が低かったこと，一つの大学のみの結果であること，抑うつ等の適応についての要因は調査されていないことなどが挙げられる。

引用文献

Gabbard , G.(1997).Transference and Countertransference in the Treatment of Narcissistic Patients. Ronningstam,E (Ed.). *Disorders of Narcissism —Diagnostic, Clinical, and Empirical Implication—*. Washington, DC: American Psychiatric Press Inc. 佐野信也(監訳);鈴木 豪(訳)(2003).自己愛患者の治療における転移と逆転移.自己愛の障害―診断的, 臨床的, 経験的意義―.金剛出版, pp.121-137.

上地雄一郎・宮下一博(2009). 対人恐怖傾向の要因としての自己愛的脆弱性, 自己不一致, 自尊感情の関連性. パーソナリティ研究, **17**, 280-291.

加藤 司(2003).大学生の対人葛藤方略スタイルとパーソナリティ, 精神的健康との関連性について. 社会心理学研究, **18** (2), 78-88.

小林智美(2011).大学生の組織での対人葛藤方略についてーソーシャルスキル, 対人関係敏感性, 社会適応への自信との関連ー.桜美林大学 修士論文.

森泉哲・高井次郎(2006).対人コミュニケーション場面における自己主張性方略の規定因―対人関係と自他意識の観点から―. ヒューマン・コミュニケーション研究, **34**, 95-117.

中山留美子・中谷素之(2006).青年期における自己愛の構造と発達的変化の検討.教育心理学研究, **54**(2), 188-198.

小塩真司(1998).自己愛傾向に関する一研究 ー性役割観の関連ー.名古屋大学教育学部紀要(心理学), **45**, 45-53.

小塩真司(2004).自己愛の青年心理学.ナカニシヤ出版.

高比良美詠子(1998).対人・達成領域別ライフイベント尺度(大学生用)の作成と妥当性の検討. 社会心理学研究, **14**, 12-24.